簿 記 ・ 会 計

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

１　前　　文

令和４年度共通テストが実施された。令和４年度共通テスト本試験の「簿記・会計」の受験者数は，＜資料１＞で示すとおり，昨年度より136名の増加となり，1,434名（前年比約110.5％）となった。共通テスト全体の受験者数が約1.0％の増加であるなかで，「簿記・会計」の受験者数は約10.5％も増加しており，簿記・会計を学んだ生徒の進路との因果関係を含め，原因分析の必要があると思われる。簿記・会計を学んだ生徒にとっては，学びの成果を確認すると同時に進路実現に生かす良い機会であり，来年度以降も受験者数の増加を期待するところである。

＜資料１＞「簿記・会計」の受験者数・平均点の推移（大学入試センター発表）

年　度	受験者数	平均点
平成30	1,487	59.15
平成31	1,304	58.92
令和２	1,434	54.98
令和３	1,298	49.90
令和４	1,434	51.83

共通テストは，センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ，知識の理解の質を問う問題や，思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が重視される。また，授業において生徒が学習する場面や，社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面，資料やデータ等を基に考察する場面など，学習の過程を意識した問題の場面設定が重視される。本年度の平均点は，昨年度の49.90点より上昇し51.83点となった。全般的に，難易度は適正であると思われる。これは，作問に当たり，受験者の実態を的確に捉え，過年度の出題等について綿密に分析・検討を行い，今回の出題に反映された結果だと考えられ，評価できる結果であった。評価に当たっては，この結果を踏まえ，「簿記・会計」の内容・範囲，難易度や分量，表現及び形式，また，センター試験及び昨年度の共通テストにおける要望や意見への対応等を含めて，14ページに記載の８つの観点により，総合的に検討を行った。

２　試験問題の範囲・構成等

今回の出題内容は，全ての問題において学習指導要領・解説の範囲内であり，特定の教科書や分野に偏ってはおらず，学習指導要領の目標に沿って，簿記・会計の基本的な仕組みの総合的な理解度を見ることのできる問題となっている。令和４年度の「簿記・会計」の出題内容と配点，学習指導要領との関連を整理すれば，＜資料２＞のとおりである。

＜資料２＞の出題内容等一覧

第１問（配点40）

設問(配点)	出　題　内　容	学習指導要領との関連
A (20) 問１(2) 問２(2) 問３(2) 問４(2) 問５(2) 問６(4) 問７(2) 問８(2) 問９(2)	○簿記部に所属する先輩と後輩の会話文形式の問題 ・取引要素に関する問題 ・財務諸表の種類に関する問題 ・収益が借方に記入される取引を答える問題 ・決算本手続きに関する問題 ・収益の振替仕訳を答える問題 ・転記・統制勘定に関する問題 ・個人企業の資本金勘定の貸方に記入される取引を答える問題 ・資本取引・損益取引に関する問題 ・損益法に関する問題	簿記⑴簿記の基礎 ア簿記の概要 イ資産・負債・純資産と貸借対照表 ウ収益・費用と損益計算書 エ簿記一巡の手続 財務会計Ⅰ⑴財務会計の基礎
B (20) 問１(2) 問２(2) 問３(6) 問４(2) 問５(6) 問６(2)	○３伝票制度を採用する個人企業の記録から，各種伝票・仕訳集計表の空欄（金額・伝票名・帳簿名・勘定科目）を答える問題 ○５伝票制を採用していた場合において，振替伝票に記入する必要のある取引を答える問題 ○買掛金勘定の残高を答える問題	簿記⑸会計帳簿と帳簿組織 イ伝票

第２問（配点30）

問１(6) 問２(22) 問３(2)	○複合仕訳帳制度を採用する個人企業の記録から，普通仕訳帳・当座預金出納帳・仕入帳・売上帳・売掛金元帳・買掛金元帳・残高試算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題 ○複合仕訳帳制度の特徴に関する問題	簿記⑸会計帳簿と帳簿組織 ア会計帳簿 ウ仕訳帳の分割

第３問（配点30）

問１(4) 問２(22) 問３(2) 問４(2)	○株式会社の修正事項及び決算整理事項から，残高試算表・損益勘定・繰越試算表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題 ○社債の買入償還に関する問題 ○利益準備金の積み立てに関する問題	簿記⑶決算 ア決算整理 イ財務諸表の作成 財務会計Ⅰ⑴財務会計の基礎

３　試験問題の内容・分量・程度・表現等

全体的な難易度は昨年度と同程度であると思われるが，資料の読み取りに時間が掛かる問題も見受けられ，やや解答時間に不足があったように思われる。第１問は，設問Ａと設問Ｂで構成され，Ａは，簿記部に所属する先輩と簿記を勉強し始めた後輩との会話文形式になっていた。個人企業の

開業から決算に至るまでの勘定記帳・収益や費用の計上・利益計算の方法など簿記の基本的な内容について幅広い知識や理解力が問われる問題であり，内容・程度ともに適切である。Ｂは，３伝票制による起票及び仕訳集計表の作成，５伝票制を採用した場合に振替伝票に記入する取引を推定する問題である。総合的な理解力と思考力が必要であり，内容・程度ともに適切である。第２問は，複合仕訳帳制度を採用する個人企業における普通仕訳帳・各種特殊仕訳帳（当座預金出納帳・仕入帳・売上帳）・補助簿（売掛金元帳・買掛金元帳）・残高試算表の作成に関する問題であり，内容・程度ともに適切である。第３問は，株式会社の決算に関する問題である。修正事項や決算整理事項は，基本的なレベルの内容で構成されているが，取引の処理に時間を要する受験者が多かったのではないかと推察する。全体を通して，基礎・基本の知識や思考力・判断力・表現力等を問う問題が，難易度や解答時間に配慮しながらバランス良く出題された良問であった。受験者には「簿記・会計」の仕組みの総合的理解が求められ，学習の達成度を図る問題として適切である。設問文や形式は明瞭簡潔で無駄や不足はなく，文章表現や漢字表記も難解にならないように配慮されている。ページ配置も総合的な資料の読み取りが必要な第２問，第３問ともに見開き２ページずつの計４ページに収まっており，読み取りやすさを確保している。また，各資料に付されている「(注)」もフォントサイズが適当な大きさで，受験者が解きやすいよう配慮されている。配点についても，全て２点問題で統一され，受験者の得意・不得意が点数の差に結び付かないよう配慮されている。多くの点でセンター試験及び昨年度の共通テストにおける意見・要望が生かされており，今後も引き続きこのような配慮をお願いしたい。

第１問　Ａは，簿記部の先輩と後輩の会話文を基に，空欄を埋めていく問題である。大学入試センターの共通テスト問題作成方針にある，「どのように学ぶか」を踏まえた，簿記部という簿記・会計を学ぶ生徒にとってなじみ深い場面であり，共通テストに相応しい問題である。昨年度の問題では，会話文が３ページに渡っていたが，会話文が２ページでまとめられ，受験者は読み取り易かったのではないだろうか。問１は，貸方に記入する取引要素を答えさせる問題である。取引要素を理解することは，簿記の基本であり，良問である。問２は，「収益と費用の発生の記載ならば［イ］での表示と同じ」との先輩の発言から，損益計算書を導き出す基本問題となっている。問３は，収益が借方に記入される取引を推定する問題となっている。思考力を問う良問である。問４は，決算本手続きに含まれないものを選ぶ問題となっている。知識を問う問題であるが，繰越試算表と合計試算表どちらも作成した経験があることから，この二つで悩んだ受験者もいたのではないだろうか。問５は，決算における収益勘定残高の振替仕訳を問う問題である。会話文全体を読むことで迷わず正解を導き出すことができたのではないだろうか。基本的な問題であるが良問である。問６は，記帳手続きにおける基本的な用語や，損益勘定の特徴を答えさせる問題である。問７は，資本金勘定の借方に記入される取引を推定させる問題である。決算時の引出金勘定の処理についての知識を問う問題である。問８は，損益取引と資本取引を問う問題である。このような出題に，受験者は戸惑ったかもしれないが，会話文の「収益や費用を発生させる」と「出資者の払い込みなど」から導き出すことができたのではないだろうか。問９は，損益法を答えさせる問題である。簿記の基礎知識を問う適切な問題である。

Ｂは，３伝票制を採用している個人企業における伝票と仕訳集計表の空欄を埋める問題と起票の問題である。示されている資料は２種類であり，問題と各資料が見開きに収まっているので読み取りやすい。問５⑵・⑶については，一取引で複数枚の伝票を起票することになる。仕訳と伝票起票の関連について知識・思考を問う良問である。問６は，５伝票制を採用した場合，振替伝票の起票をおこなう取引を推定する問題となっている。

第２問　複合仕訳帳制度を採用している個人企業における各種帳簿上の空欄を埋める問題である。問１の資料３の普通仕訳帳の空欄に勘定科目を答える問題では，資料２の取引から仕訳を推定する必要がある。資料２の16日では未着商品売買，28日では手形貸付金と幅広い知識を問う適切な問題である。問２は，資料１の２月末における勘定残高，資料４の特殊仕訳帳，資料５の売掛金元帳・買掛金元帳，資料６の残高試算表の空欄に金額を記入する問題である。資料１から資料６までの資料全体を見渡し，各資料の関連を正しく読み取り，答えを導き出す思考力が要求されるため苦戦した受験者が多かったのではないだろうか。資料全体を見渡す力に加え，取引と各種帳簿，帳簿相互間のつながりをしっかりと理解していないと解答することは難しかったであろう。問３の複合仕訳帳制度の特徴に関する説明文の中から誤っているものを答える問題では，⓪の「複数の担当者」の記述で戸惑った受験者も多いのではないだろうか。

設問全体としては，比較的解答しやすいものと思考力を要するものがバランス良く配分されており，やや読み取りに時間を要するものの，受験者の思考力・判断力・表現力等を問うことのできる良問であったと思う。

第３問　株式会社の決算において決算整理前残高試算表・損益勘定・繰越試算表を完成させる問題である。資料１は，決算整理前残高試算表である。勘定科目及び貸方金額欄には空所がある。資料２は，修正事項である。資料１⑵では現金勘定の実際有高と帳簿残高の不一致の原因を処理させるが，水道光熱費を計上し，差額を雑益勘定として捉えられるか判断する力が求められた。資料３の決算整理事項は，資料２の修正事項の処理を考慮することなく処理でき，難解にならないよう配慮されている。また，建物の減価償却には，定額法を採用しており，計算は容易であることから，資料１と資料５の減価償却累計額 イウエ と ナニヌ は正答率も高かったのではないだろうか。一方，備品の減価償却には，定率法を採用しているが，前年度以前分の減価償却累計額を計算する必要はない。帳簿価額の計算が必要ないことから今年度分を導き出すことは容易にできる。減価償却の定額法と定率法の違いを理解しているか知識が求められた。資料４は，損益勘定である。借方の シスセ は，勘定科目も空欄で受験者は戸惑ったかもしれないが，株式会社会計を理解していれば，空欄に入る勘定科目が，繰越利益剰余金勘定であると判断できる。また シスセ が当期純利益額であることを理解できていれば，損益勘定の借方合計と貸方合計の差額から金額を算出するのではなく，資料１と資料５の繰越利益剰余金勘定の差額で求められた。問４は，繰越利益剰余金の配当および処分時における，利益準備金の金額を答えさせる問題である。会社法の規定の知識を問う適切な問題である。

設問全体としては，受験者の思考力・判断力・表現力等を問うことのできる良問であったと思う。

４　ま　と　め（総括的な評価）

⑴　受験者の学習達成度を適正に判定できる問題である。今回の問題は，高等学校において簿記・会計を理論的かつ偏りなく学ぶ必要性を示唆しており，高等学校における簿記・会計教育の在り方へのメッセージが感じられる。理解の質を問う出題と思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことを意識した出題であった。今後もこのような作問がなされることが，簿記・会計教育の発展につながるものと期待する。

⑵　やや解答時間に不足が生じている傾向が見受けられる。受験者が問題全体にわたって解答する時間が確保できるような問題作成となるよう配慮をお願いしたい。また，簿記・会計は高校入学後に初学することを踏まえ，学習指導要領への準拠はもちろん，教科書で使用されている表現の使用等の重視を引き続きお願いしたい。